紙面のガーデニング
ラルクの百日紅

浦学だより

Vol.92

URAWAGAKUIN HIGH SCHOOL

2014.10.1

〒336-0975
埼玉県さいたま市緑区代山１７２
TEL 048-878-2101 FAX 048-878-3335
http：//www.uragaku.ac.jp/
発行者　浦和学院高等学校広報渉外部
編集者　浦和学院高等学校企画部

部活動大会報告

テニス部男子　インターハイ

3年E組　**矢部　馨**（三郷市立早稲田中学校出身）

私達テニス部男子は、県予選の団体戦決勝で川越東高校に負けてしまいインターハイに出場することが出来ませんでした。しかし、私は、個人戦のシングルスでインターハイに出場することができました。私が出場できたのも、先生やコーチ、保護者、そしてテニス部の仲間のお陰だと思っています。インターハイ当日は、団体で出られなかった仲間の気持ちを背負いコートに入りました。１回戦は動きが固まったもののなんとか勝ち進み、2回戦でもなんとか集中力を保つことができました。しかし、3回戦で敗退となりました。

この2年半、サポートして下さった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。また、今の１、2年生には来年の全国選抜やインターハイに向けて頑張って欲しいです。2年半、本当に有難うございました。

ハンドボール部男子　インターハイ

3年H組　**松本　歩**（三郷市立北中学校出身）

私達男子ハンドボール部は、春の全国選抜大会に出場することができなかった悔しさを胸に、インターハイ予選を勝ち抜き、神奈川県で行われたインターハイに出場することができました。インターハイの1・2回戦の試合は、相手に大差をつけて勝つことができました。しかし、3回戦の大分雄城台高校との試合では、立ち上がりの自分たちのミスから相手に一気に点差をつけられてしまいました。その後もミスが続き、自分たちの試合が出来ずに負けてしまいました。日頃から、厳しく指導して下さった岩本先生をはじめ、応援していただいた保護者の方々、浦学の応援団の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。また、私達はハンドボール部の一員として、毎日生活することで人間的にも大きく成長できたと思います。これからも浦学ハンドボール部の応援をよろしくお願いします。

テニス部女子　インターハイ

3年K組　**廣川　真由**（越谷市立富士中学校出身）

私達テニス部女子は、例年よりさらに厳しい県予選を勝ち抜き、なんとか団体選と個人戦のシングルス、そしてダブルスに出場する事が出来ました。

私たちは、全国制覇を目指して毎日練習してきましたが、結果はベスト32とまさかの敗北を喫しました。さらに、個人戦でも思い通りの結果は出せず、改めてインターハイの厳しさを痛感させられました。3年生は、これで引退となってしまいましたが、後輩にはこの悔しさをバネに日々練習に励んでもらいたいです。是非、今までに成し遂げた事のない全国制覇を達成してもらいたいです。

私達選手は、保護者の方々や先生方、チームの仲間の支えがあり、ここまで戦う事ができました。本当に感謝しています。今後とも、テニス部の応援をよろしくお願いします。

パワーリフティング部　全国選抜大会

2年V組　**堀口　徹也**（さいたま市立岩槻中学校出身）

私達パワーリフティング部は、8月3日の全国大会に出場することが出来ました。今回の大会は、3月の選抜大会であまり良い結果を出せずにいたということもあり、部員一人ひとりがとても練習に力を入れ、団結力もさらに高まりました。その結果、男子は団体4位を勝ち取ることができました。そして、個人戦でもそれぞれ上位に入ることができました。さらに、女子は二人も世界大会に出場することができました。

私は、パワーリフティング部の部長になれたことにとても誇りを持っています。そして、今まで支えてくださった先生方や先輩方、保護者の方々はもちろんの事、一緒にここまで頑張って感動の場面をつくり、期待に答えてくれた部員全員に感謝の気持ちを送りたいと思います。

ソングリーダー部　School & College Competition 2014

3年N組　**成塚　南美**（鴻巣市立鴻巣西中学校出身）

私たちは、8月に駒沢体育館で実施された「School & College Competition 2014」という大会に出場しました。私たちにとって初めて"SPLASH Red"，"SPLASH White"の2チームでの出場となりました。今回3年生は高校生活最後の大会となり、１、2年生は初めての大会なので、大会に向かう思いは異なりましたが、見る人に楽しんでいただけるように気持ちをひとつにして演技をすることができました。そして、SPLASH全員が楽しそうに踊っている雰囲気が感じられ、演技終了後私達自身とても感動しました。結果は、Redチームが2位、Whiteチームが7位と好成績を残すことができ、これからの励みになりました。しかし、この結果に満足することなく、下級生にはさらにSPLASHの魅力を磨いてもらいたいと思います。また、3年生はどのような時でも、精一杯力を発揮することの大切さを学びました。これからの進路にそれを活かしていきます。これからも応援をよろしくお願いします。

芸術鑑賞会

進学類型

1年X組　**加藤　彩乃**（越谷市立富士中学校出身）

私は、今回、芸術鑑賞会でココロコさんによるゴスペルコンサートを観ました。ゴスペルのことは、前日の事前指導の際に先生からお話を聞き、アメリカ発祥の宗教音楽であることを知りました。私は、今までゴスペルをあまり聞いたことがなかったのですが、曲目を見ると私が以前から知っているものもあったので、その曲がどんな音楽になるのだろうと、とても楽しみにしていました。

当日、鑑賞会の最初の曲のアメイジンググレイスは、それまで私が聞いたことのあるものとは全く違い、すごく綺麗で迫力がありました。ココロコさんは、4人の女性歌手によるヴォーカルユニットですが、それぞれの歌声が重なり合いどの曲も鳥肌が立つぐらい素敵なハーモニーでした。そして、元気をもらえる歌ばかりで、何よりココロコさんが心から楽しそうに歌ってらっしゃるので、聞いている私も思わず体を揺らしてしまう程楽しくなりました。

今回、ゴスペルというひとつの芸術に触れ、素晴らしさを知る事ができてとても良い体験になりました。私はアートコースで美術を学んでいますが、良い音楽を聞いたことでこれからの自分の作品制作にも生かしていきたいと思います。

特進類型

1年C組　**古怒田　遥**（越谷市立新栄中学校出身）

私は、今回、生まれて初めてオペラ鑑賞をしました。最初、私はオペラをよく知らずにミュージカルのようなものだと思っていました。しかし、実際は全く違い、オペラは全てのセリフを肉声で歌い、音楽によって表現されていました。また、オペラには重唱というものがあり、一人がセリフを歌っている時に、もう一人が別のセリフを歌います。これは、オペラでしか出来ない面白い表現の仕方だと思いました。

今回鑑賞した「蝶々夫人」のなかの、蝶々夫人役の横山さんの声量と声の高さに、私は本当に驚きました。一緒に演奏していたオーケストラに負けないくらい劇場に声が響き渡り、鳥肌が立ちました。また、蝶々夫人の設定は15歳ですが、セリフに当時の純粋な気持ちが表現されており、より切なさが感じられました。

オペラは音楽や光、影までも利用して、最大限に役の感情や舞台の情景を表現しています。今回、鑑賞したのは「蝶々夫人」という日本が舞台の切ない内容の作品だったので、次は楽しいオペラも見てみたいと思いました。

フレッシュマンキャンプ

1年A組　**小野　沙稀菜**（川口市立青木中学校出身）

私は、今回のフレッシュマンキャンプを通して、1年A組の団結力をとても高めることができたと思います。

まず、バーベキューでは、食材の準備やかまどの火の準備、調理などの全てを自分たちで行い、生徒一人ひとりの自立精神や行動力を高めることができました。

そして、2日目のオリエンテーリングでは、班のみんなで最後まで全力で取り組み、頑張ることができました。お互いを励まし合い、声をかけ合いながら行うことができ、より一層友情を深めることができました。

このように、フレッシュマンキャンプでは私自身も成長することができ、クラス全体もまとまり、第3団としてもしっかり行動できたことがとてもよかったと思います。これからも、自分自身の意識を高めて成長していけるように努力していきたいと思います。

平成26年度 受験シーズンに向けて

昨年度の入試は、ここ数年で最も記憶に残るものとなった。まずは何と言っても、2月中旬の大雪の影響で、試験実施に大変な混乱が生じたことが思い出される。また、昨年は旧課程最後の入試であったことや、ネット出願が始まった年であったことなど、何かと話題が多い年であった。そしてこれらのことは、今年度入試にも大きな影響を与えるだろう。

平成26年度入試で、最も注目すべきは、やはり新課程入試についてである。昨年度は、新課程入試を控えた「後がない」意識により、いわゆる浪人を避けた出願が目立った。これにより今年度は、現役中心の入試になると予想される。

ネット出願についても、軽視できない問題である。インターネットで出願できるという手軽さに加え、ネット割引なども導入されたことにより、1人当たりの出願数が増加した。受験人口が減っているにもかかわらず、志願者数は増えて倍率があがるので、受験生にとっては、今後も厳しい入試が続くことになる。

こうした中でも、実績を伸ばしている本校を、各大学は高く評価してくれている。難関校からの指定校推薦の依頼が増えたり、高大連携入試を提携することができたのは、その評価の表れであろう。

3年生の生徒諸君は、これらの制度も上手に利用しながら、希望進路の実現に向けて頑張ってもらいたい。

進路指導部長　**高橋　広和**

キャリアガイダンス

今年度も1年生を対象に、職業について見識を深める『キャリアガイダンス』が行われました。毎年恒例の行事ではありますが、今年度は生徒の在籍が例年より100名程度多く、また日程が例年より遅かったということが、通常と大きく違っていました。そのため準備には十分時間をかけてきました。開催したのは全部で26種31講座です。保育やスポーツ、ゲームクリエイトなどのデザインといった講座は複数の学校をお呼びしました。生徒は初めて大学等の上級学校の先生の授業を受けたのですが、生徒の興味を引く内容が目白押しでした。最初こそ緊張していましたが、多くの生徒は目を輝かせ、大きくうなずきながら受講していました。今まで漠然と眺めていた職業や自分の未来について、専門の先生方のお話を聞いて、いろいろな発見があったのではないでしょうか。これをきっかけにして、2学期に本格的に始まる文理選択について、ぜひ、深く考えてください。

1学年進学指導主幹　**菅原　美香**

大学・短大説明会

毎年7月7日の七夕の日に行っている3年生対象の大学・短大説明会を今年度も行いました。

7日の当日は梅雨時期ということもあり、朝から蒸し暑い日でした。10時開始のところでしたが、多くの生徒が時間前に集合したことから、30分早めて受付を開始しました。行事としては最後の大学・短大入試相談会ということで、第1志望が決まっている生徒も、まだ数校の中で悩んでいる生徒も、真剣に大学の先生方の話を伺っていました。会場である第2校舎では、進路に対する生徒の意気込みがあふれ、エアコンの風も感じられないほどでした。当日は80校近い大学・短大の先生方が、本校の生徒のためだけに相談を受けて下さり、その中でも毎年この行事に来ていただく先生も多数おられ、生徒たちの熱心な態度に感心されておりました。

いよいよ3年生は夏休みも終わり、本格的な受験シーズンに突入します。この入試相談会で目標とする学校を見つけた人は少なくないはずです。どんな時でも目標を見失わずに突き進み、かつ冷静に進路活動に取り組んでもらいたいと思います。

3学年進学指導主幹　**青木　秀彦**

特進類型夏季合宿進学講座

毎年恒例となっている特進類型の夏季合宿が、今年も7/26～7/30の日程で長野県車山高原にて行われました。この合宿の目的は「学習体力の向上」と「自分への挑戦」です。生徒たちは朝の6時半より行われる小テストに始まり、1コマ90分の授業を1日6コマ、計9時間受講します。一見すると過酷なカリキュラムに思われますが、生徒たちは休み時間であっても1分1秒を大切にし、9時間の講座の後も真剣な表情で自習に励む姿が全学年において印象的でした。また、各学年で行うグループワークや車山ハイキングも良い気分転換となり、その後の講座に向かう姿勢にさらに勢いをつけることができていました。

今回の合宿では、各々の目標とする「学習体力の向上」に向けて、各自が自分の限界に挑戦することができました。また、ただ勉強だけをしに行ったのではなく、人間的な成長とは何かをも学ぶことができた実りある合宿となったことが一番の収穫でした。生徒たちには、最大の目標である「志望校合格」という栄冠を目指して突き進んでもらいたいです。

特進類型　1学年担任　**馬場　裕子**

ボランティア報告

3年V組　**内橋　李緒**
（さいたま市立八王子中学校出身）

活 動 日　平成26年3月2日
活動場所　埼玉県県民活動総合センター
活動内容　こども☆夢☆未来フェスティバル2014

今回、初めて「こども☆夢☆未来フェスティバル2014」のボランティア活動に参加しました。今回のボランティア活動では、子どもたちが楽しみながら、お金に関する知識が得られるよう、クイズ形式でプラカードなどを使い質問をしていきました。このクイズを出していくなかで、子どもたちと同じ目線に立つということは私にとって色々な発見がありました。今まで不思議に思わなかったことも、質問者として改めて考えるとよく分からないものも沢山ありました。また、小さな子どもを対象に分かりやすく伝えるということも難しく、自分自身が正しく理解していないと噛み砕いて説明することができませんでした。他の人に教えるということは、まず自分が分かっていなければならないということが大切だと体感しました。

全体を通して、同じ年齢の方だけでなく、様々な歳の方と交流をもつことによって世界が広がるなと感じました。これからまた機会があればボランティアに積極的に参加したいです。

2年W組　**石塚　万里奈**
（さいたま市立大原中学校出身）

活 動 日　平成26年5月3日
活動場所　市民の森　見沼グリーンセンター
活動内容　スタンプラリーのお手伝い

私は今回、ボランティアに行って色々な国の文化やさいたま市の姉妹都市について学んできました。

私が活動した場所の前にあるステージでは、色々な国の音楽や民族舞踊の発表をしていました。そこでは、楽器や衣装が違うのはもちろん、表現の仕方なども異なっていました。そして、私と一緒に活動した人の中には、ベトナムから来た人もいて、ベトナムの食べ物や文化について、直接お話を聞くことができたことは、私にとってすごく貴重な体験でした。

また、私は小学生以下のスタンプラリーのお手伝いをしました。その際、質問を出して答えてもらうということをしたのですが、子どもの中には人見知りの子などがいて、分かりやすい説明をすることが難しかったです。この体験を通して、子どもの対応の仕方がなんとなく分かった気がします。外国の方にははっきりゆっくりと、子どもには優しく丁寧に、相手によって話し方を変えていかなければいかないということを知り、これから意識して話していきたいです。そして、もし機会があれば、このようなボランティア体験をまたしてみたいと思います。

クロスカルチャーツアー

2年B組　**下久保　三瑠**
（八潮市立八潮中学校出身）

私は、7月27日から8月9日までの約2週間、異文化を学ぶため、アメリカのロサンゼルスでのクロスカルチャーツアーに参加しました。私が今回のクロスカルチャーツアーで学んだ事は、自分の考えを主張することの大切さです。私達が、普段日本で生活をしていると「まぁまぁ」や「あまり」といった曖昧な表現が多いことに気付かされます。しかし、アメリカで生活していると、はっきりと自分の意見を主張しないと自分の思いが相手に届かないことのほうが多かったのです。

私は、ロサンゼルスのロングビーチという場所で、現地の学校に通いながら2週間ホームステイをしたのですが、ホスト先で苦い経験をしました。それは、ホストマザーに「お腹は空いている？」と聞かれたとき、本当はあまり空いていなかったのですが、せっかく用意してくれようとしているのに悪いな、と思い「まぁまぁ空いています」と答えました。その後、用意してくれた食事を見ると、私の顔の2倍ほどの大きなお皿に沢山の野菜や肉がのった料理だったのです。私が空腹だと思い、沢山の料理を用意してくれたホストマザーの優しさに感動すると同時に、とても困りました。日本特有の“相手を思いやる気持ち”は大切ですが、きちんと自分の考えや意思を相手に明確に伝えることが必要なのだと学びました。私は、このような経験を生かし、日本での生活にも役立てていきたいと思います。

今年も【浦学ふぁみり～応援写真コンテスト】に応募しよう！

今年もまた、『がんばる仲間をみんなで応援』をスローガンに
「浦学ふぁみり～応援写真コンテスト」を実施します。

日　程	○応募期間	2014年11月29日（土）
	○投票期間	2015年 1月 8日（木）～17日（土）
	○結果発表	2015年 2月 6日（金）
応募方法	1．対　象	部活動、学校行事、ボランティア活動など学校生活の様子
	2．提出物	①写真、SDカード、USBメモリーのいずれか ②応募用紙（用紙は学校に用意しています。） 応募者名、撮影日、大会・イベント名、撮影シーンの説明を記入 ＊生徒の場合は学年・クラスも記入
	3．提出方法	生　徒 → 担　任 保護者 → 生　徒 → 担　任

＊部活動大会の応援時撮影写真など、生徒のみなさんはもちろん、保護者の方々からもたくさんのご応募をお待ちしております。お子様を通してご応募ください。

※学校の情報が満載のＨＰ　「浦学ふぁみり～」（http://www.uragaku-family.jp/）は
≪浦和学院ホームページ→浦学ふぁみり～≫からご覧になれます。

美術コース

サマーアートキャンプ

8月25日（月）から27日（水）の2泊3日で、今年で3回目となるサマーアートキャンプが行われました。今年は、参加人数が例年よりも多く、生徒48名と引率教員4名という大人数でのキャンプとなりました。今年のサマーアートキャンプでは、軽井沢市街地にある矢ケ崎公園を写生場所に選び、自然豊かな木々の緑と色鮮やかな花々や、公園内に設置してある木馬や遊具などがあり、何気ない景色にも軽井沢の光や澄んだ空気が生徒の表現欲求を高まらせる魅力的な場所でした。

まず、アートキャンプ1日目には、それぞれの写生場所を選定し、鉛筆による下書きから始めました。2日目は、絵の具による彩色を行いました。しかし、途中から天候が崩れ始め、午後は宿泊場所である文化学園軽井沢山荘での制作となりました。1日目に撮影した写真を参考にしながら、それぞれのペースで画面に向かい、慎重かつ大胆に絵の具をのせていきます。夜は夕食後に中間講評を行い、教員からのアドバイスを聞きながら今後の画面への取り組みを考えました。また、3学年全体での講評のため、1年生は2，3年生の作品を真剣な眼差しで見つめていました。3日目は、最終仕上げです。1分1秒を無駄にしないように、生徒らは集中して作品に取り組んでいました。また、今回のサマーアートキャンプでは2つの美術館訪問を行いました。1日目は、現代日本画家の千住博美術館を訪れ、2日目はニューアートミュージアムにて国内外の新進気鋭の現代作家作品を鑑賞しました。日常とは違う環境に身を置き、限られた時間のなかで制作をしたことで集中力が身に付き、豊かなアート体験をしたことで今後の制作への意欲にもつながったアートキャンプとなりました。

一般生徒ボランティア

7月16日（水）～18日（金）の2泊3日、第1学期末の家庭学習期間を利用して、生徒22名、教職員3名の計25名で一般ボランティアツアー「石巻応援隊」を実施しました。このボランティアは、特定の部活動や類型・コースに限定せず、「一度は自分の目で被災地を感じてみたい」「何か役に立ちたい」という、意識の高い浦学ふぁみり～が全額自己負担で参加するツアーです。

今回の主たる活動目的は、以下の3本立てで行われました。

① 一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンターが推進する「仮設きずな新聞の配布」

② 浦学初となる「漁業ボランティア」で浜を元気にする。

③ 被災地を自分の目で見る・買い物をして復興に協力する。

今回、交流活動を経験した生徒2名の感想文を紹介します。

1年W組　**川村　彩**（上尾市立原市中学校出身）

私は以前から災害救援活動に興味があり、今回の石巻ボランティア活動に参加させて頂きました。

活動内容は、漁業のお手伝い、被災地の見学・「仮設きずな新聞」の配達などでした。被災地の様子をテレビを通じてしか見た事がなかったので、実際現地に行き、家のコンクリートの一部や家の家具等が散乱しているのを見て、津波の恐ろしさを改めて感じました。なかでも一番驚いたのが、石巻市小学校の校舎が骨組みだけになっていて、多くの尊い小さな命が津波によって失われたということです。私は残された家族がどんな思いでいるのか言葉に表すことができませんでした。復興といいますが、まだまだ震災前の町の様子には程遠いように感じました。

今回の災害救援活動で一番勉強になったのが、「仮設きずな新聞」配達ボランティアです。この新聞配達の意味は「仮設住宅での暮らしに役立つ新聞」「ココロが元気になる新聞」であり、私達ボランティアが一軒一軒回って配布し、住民一人一人と向き合い話をする事です。最初は緊張してしまい、なかなか住民の人と話をする事ができませんでしたが、自分から笑顔で挨拶をしたら会話ができるようになりました。仮設住宅の人達は色々な思いを抱えながら暮らしています。そんな状況でも私達に笑顔で接してくれて、逆に私達が元気をもらいました。みんなが前向きな気持ちでいる事に強さと優しさを感じました。

この3日間を通じて、人と人とのつながり、絆、前向きな気持ちを学ぶ事ができました。私達は衣食住足りている事があたり前の様に、何不自由なく暮らしています。そんな暮らしをしている自分が情けなく思いました。私は一日一日を大切にし、私は将来看護師になり、少しでも被災地の人達の役に立ちたいと思います。最後に、被災地の人達の生活が少しでも安心、安全であって早い復興を願うばかりです。

1年W組　**間島　百香**（越谷市立新栄中学校出身）

私が石巻のボランティアに参加しようと思った理由は、震災後の石巻の話を少しずつ聞いていくにつれて、知らないままだとダメだと思い、もっと知りたいと思ったからです。

今回、現地に3日間行くことができました。1日目は初めての石巻で、もともと家があったところも何もない状態でした。見ただけで津波の怖さを思い知らされるほどでした。漁師さんが仕事の手伝いをさせてくださった事と船に乗せてくださった事は本当に貴重な体験ができたと思います。震災当時の話も聞けて良かったです。

2日目・3日目にやらせてもらった「仮設きずな新聞配達」はすごく難しいものでした。しかし、やっていくにつれて分かっていくことがありました。それは、人と関わることの大切さです。住民の方は当時の話をたくさんしてくれました。そして、今の状態のことも話をしてくれました。仮設住宅の住民の方同志では、楽しいことばかりではなく、苦労ばかりの人もいるそうです。人は話をしなくなると言葉を忘れたり、ぼけてしまったりしてしまいます。そのようになってしまっている方もいらっしゃると聞いて驚きました。しかし、私たちが新聞を配達に行くと喜んでくれる方が多く、「若者と話をすると元気がでる」と言ってくれた方もいました。私はこの新聞配達で住民の方達とこんなに楽しく話せて充実したものになるとは思いませんでした。

私は、このボランティアに参加して、すごく貴重ですごく充実した3日間になったと思います。石巻に行く前は、テレビで少し情報を聞いていただけで実際の様子は知りませんでした。しかし、実際行ってみて話が聞けたこと見られたこと、そして、災害の怖さも知ることができました。この3日間で、「行ってみなければわからないことがある」、「人と関わることは何よりも大切だ」ということを学ぶことができました。これからは、自分ができることはやっていこうと思います。石巻に行って本当に良かったと思いました。

平成26年度 夏休み工事報告

この夏休み期間中、第4校舎昇降口・教務室のリニューアル、防犯カメラの増設工事が行われました。

第4校舎は、下駄箱の新設、導線の正常化、往来の通行緩和を考慮した設計に加え、弁当売場の新設、自動販売機の増設を行いました。体育館を改築した際に、2階の連絡路が使用不能となったため、利便性が悪い状態にありました。ガラス張りで遮光性を考慮した昇降口は、登校時に清々しい気分にさせてくれます。

また、生徒の安全を考える本校では、外部侵入に加え、快適な学校生活を過ごせるよう校内の防犯カメラを校舎内外に25台から48台に増設配置、管理運営を行ってまいります。

浦和学院高等学校　石巻交流プロジェクト

「笑顔・希望」ー明日へ共に歩む

頑張る仲間をみんなで応援!!

特進類型　学習サポート

8月4日（月）～7日（木）の3泊4日、特進類型の生徒17名による石巻交流活動ー学習サポートが行われました。今回は、従来の石巻市大原小学校・寄磯小学校での学習サポートの他、夜は中学校対象の「学びの場」のサポート、漁業体験ボランティア、仮設住宅でのお茶っこ（茶話会）も追加され、ライフスキルを高め多くの成果を得た活動となりました。

今年で3回目となるこの活動に2回目、3回目のリピーターがいてくれたことを嬉しく思います。参加した生徒2名の感想文を紹介しつつ、生徒たちがそれぞれの立場で参加し、その後の行動に活かしてくれていることをお伝えします。

3年B組　**本多　そらな**
（国立埼玉大学教育学部附属中学校出身）

私がこのボランティアに参加したのは2回目である。2回とも「教師になるための勉強をしに行く」という目的を主としての参加だったが、今回は「被災地の復興状況を自分の目で確かめる」、「子どもとの約束を果たす」という目的のほうが大きかったかもしれない。

被災地の状況は、去年と大きくは変わっていなかった。家などがあった場所は草が生えて一見何もなかったかのように思えてしまう風景、仮設住宅にはまだたくさんの子供からお年寄り。震災から4年、この状況からすると津波がどれほど恐ろしいものであるか、どれだけの被害を与えたか想像がつく。だが、何度足を運んで、何度津波の高さを示す棒を見ても、震災当時そこにいた人々の気持ちやその様子を見ていた人の思いは分からなかった。

今回、東松島市野蒜に行き、UR都市機構の方から話を聞くことができた。簡単に言ってしまうと町ごと高地に移動させる計画を進めているとのことだ。色々な条件があって町を移動させるには何年もかかるが、去年と変わらぬ風景だから復興が遅れているのか…と少し残念に思っていた私にとって具体的な未来の話を聞けたことはとても嬉しいことだった。

私にとって嬉しいことはそれだけじゃなかった。民宿「めぐろ」の方々の優しい気遣い。美味しい料理。寄磯小学校の生徒が私のことを覚えてくれていたこと。生徒が2回目にして初めて震災当時のことを自ら話してくれたこと。先生になって寄磯小学校にまた来てねと言ってくれたこと。中学生との新鮮な触れ合いができたこと。1回目より2回目のほうが感動を受ける場面は多かったように思う。そしてまた行きたいという気持ちが自然と湧いた。

最近はテレビで復興の様子について報道されることが少なくなり、被災地に行ってみないと分からないことが増えた。募金をするだけでは分からないことがたくさんある。被災地に行くことが一番の支援であり、自分にとって最高の経験値となる。

3年B組　**鈴木　沙月**
（川口市立八幡木中学校出身）

まず、津波や地震の被害を見たり聞いたりして実際に感じた事を述べようと思う。

現地に行っての第一印象は、本当に津波がきたのだろうか、だった。しかし、まだがれきのある所や津波で倒された建物、住宅街があったであろう所には、草が生えてるだけの状況などを見て、やっと理解できた。ここに本当に津波がきたんだな、と。

大川小学校への訪問は特に衝撃的だった。体育館はなくなっていたし、校舎をつなぐ渡り廊下は柱ごと折れて倒れていた。家が建っていたという所には土台すら残っていなかった。それを見て前日の漁師さんの話を思い出した。「平面の距離よりも高さで逃げた人が生き残っている。亡くなった方と生き残った人は紙一重だ。」と。例えると“ディズニーランドで津波が来るとなったら舞浜駅ではなくシンデレラ城の一番上に逃げろ。ともかく高さをかせげ。”だと言っていた。私は、天災が起こるのは自然であり、どうする事もできないから仕方のない事かもしれないとも思った。しかし、己の生死を決めるのは自分であると思い知った。

さて、次は小学生や中学生との交流について記そうと思う。

小学生との交流はとても楽しかった。学習では漢字を聞かれたら教室内で宝さがし形式で探したり、辞書を使ったりと工夫した。工作の時は、少し私が手伝いすぎたと反省点が多い。どう接すれば良いか戸惑っていたけれど、小学生が元気いっぱいな笑顔で話しかけてくれたので、いつの間にかそんな心配はふっ飛んだ。プールの時間は小学生のフルパワーや元気さに驚いた。

私の訪問した小学校にはドイツの支援で建てられた公民館があった。しかし、年に数回使うくらいの公民館にお金を使って、本当に必要な人の所に届いていないという現状を聞いた。それを聞いて私は、募金も大事かもしれないが、それよりも現地の商品を買うなどしてお金の循環がここには必要ではないだろうかと考えた。

中学生との交流は、1日目何もできなかったという大失態を犯したため、2日目はリベンジすることに。担当の子をよく観察して、手が止まった問題をやっと別紙に書いて解説してみる所から始めて、やっと話せるようになった。担当した子は隣の席の子と仲が良く、話して手が止まることがしばしばあったので、範囲を指定してそこを終わらせたら残り時間は自由にしていいと言ってみると、話さずきちんとノルマを達成してくれた。1日目はこの子の力を引き出すことができなかった事をふまえて、人に何かを教える事の難しさを痛感した。家に帰り、先ずした事は、今回学んだ事をふまえ、家族がどこに逃げるかを後で連絡できるように候補地を何ヶ所も決めることだった。何よりも個人で生き延びる事を最優先事項として。